

## 〔研究報告〕

## 現地参加者の専門職としての成長からみた共同研究の意義

池西悦子 栗田孝子 奥井幸子

Meanings of Collaborative Nursing Research Project  
from the Viewpoint of Participants' Professionalism

Etsuko Ikenishi, Takako Kurita, and Yukiko Okui

## I. はじめに

本学では、開学当初から、看護実践現場の業務改善・充実に直結した課題に取り組むことにより、県内の看護サービスの質的向上を図ると共に、大学の教育活動の基盤確立を目指し、実践現場との共同研究を行なっている。

共同研究の目的としてあげられた現場課題への取り組みの成果としては、毎年行なわれている共同研究報告と討論の会で報告、討論がなされており、平成15年度の共同研究の成果・改善点についても、自己点検評価および現地看護職者を対象とした調査から、看護実践の改善・充実に貢献できている現状が明らかにされている<sup>1)</sup>。

しかし、共同研究が現地参加者の専門職としての成長という視点からどのような意義があるのかについては明らかにされていない。

そこで本論文では、共同研究としての「健康づくり計画」への取り組みが、現地参加者にどのような影響を与えたのかを、現地参加者の認識から明らかにし、共同研究の意義を検討することを目的とした。

## II. 研究方法

## 1. 研究対象者

共同研究に参加したA町保健センター職員5名、およびB保健所職員1名。

## 2. 調査方法

まず、共同研究が現地参加者の仕事や専門職としての成長に与えた影響についての自己記入式質問紙を作成

した。次に、現地参加者個々に対して、研究目的、倫理的配慮についての考え方、回収日を現地に出向き説明し、後日現地にて回収した。

## 3. 調査内容

現地参加者の専門職としての成長に共同研究がどのように影響を与えているのかについては、共同研究での気づきや学びがその場だけでなく、その後の実践においても活用できる力となっているかについてと、その要因を明らかにするため、以下のような項目について調査を行なった。調査項目は、職種、経験年数、および共同研究への取り組みが仕事や自らの専門職としての成長に影響を与えたと考える内容とその要因であった。

## 4. 分析方法

記述内容を何度も読み返し、共同研究への取り組みによる自己の反応や、仕事や専門職としての自己の変化に関する記述内容に着目し、語彙の意味を変えないように要約した。要約した内容のうち、類似するものをまとめてカテゴリー化し、命名した。さらに、カテゴリー間の関係を、原因と結果の関係から分析した。

確証性および一貫性を維持するため、分析過程において1名の研究者が分析したものを3名の研究者間でディスカッションを行い、合意が得られるまで検討した。

## 5. 倫理的配慮

研究目的および得られたデータは、個人が特定できないように全て匿名で扱うこと、研究目的以外には使用しないことを直接個々の対象者に説明し、協力を依頼した。

表1 A町における共同研究過程

事業内容(回数)
1. モデルの提案と学習会(7回)
2. 既存資料の分析およびヒヤリングによる健康問題の課題抽出(4回)
3. A町の理念・目標の明確化(1回)
4. アンケート調査の企画・実施・分析(22回)
5. 調査結果の住民への提示と討議、フォーカス調査(9回)
6. 住民の声の分析(2回)
7. 計画案の策定・吟味・パンフレット作成(14回)
8. 議会での決定によりパンフレット配布

### Ⅲ. 共同研究における活動の実際

A町において、コミュニティーをパートナーとし、エビデンスに基づいた健康問題を明確にした健康なまちづくり計画を策定することを目的として、以下のような活動を行った。

まず、コミュニティー・アズ・パートナーモデル<sup>2)</sup>についての学習会を開催し、参加者全員が文献を読み、概念の意味や現状との照合について議論を行なった。

次に、A町の実態に関するヒアリングと討論を行なった。具体的には、既存資料をコミュニティー・アズ・パートナーモデルの考え方で整理し、課題を明確にした。この討論において、A町の理念・目標を明らかにする必要性が生じ、理念・目標の共有のための議論も行なった。

三番目には、住民を対象とした調査の企画・実施・分析を行なった。この調査では、健康な暮らしに関する住民の考え方や行動を明らかにし、健康問題を探る目的で、20～69歳で、性別、年齢は無作為抽出による1,000人を対象とした。内容は住民がどのようなことを大切に考えているのか、既存資料から問題が推定されたことに関する質問、将来にわたる住民の困りごとを重視した内容であった。この結果を「健康を考える集い」で住民に説明した上で、さらに住民の声を聞くフォーカス調査を行った。

最後に、これらの分析から計画の素案を作成し、保健センター運営協議会で検討した上で、パンフレットの作成、配布を行なった。(表1参照)

共同研究の活動回数は、2年間、計54回(1回3～4時間)で、全員参加の会は月平均2～3回であった。

### Ⅳ. 結果

質問紙は、全員からの回答が得られた。

#### 1. 対象者の属性

職種は、保健師4名、栄養士1名、歯科衛生士1名であった。経験年数は、10年未満2名、10年以上20年未満1名、20年以上30年未満3名であった。

#### 2. 共同研究が現地参加者に与えた影響

共同研究が現地参加者に与えた影響を分析した結果、11の類似した内容が抽出できた。

さらに、内容同士の関連が見られるものを1つのカテゴリーとしてまとめると、最終的に7カテゴリー『』となり、そのうち2カテゴリーは、それぞれ3つのサブカテゴリー「」を含む構造に整理できた。(表2参照)

カテゴリー『保健活動についての認識の変化』は15件の記述があり、「地域看護の理解の深化」7件、「住民理解の深化」4件、「実践に取り組む自己の姿勢についての反省」4件から構成されていた。

「地域看護の理解の深化」は、「保健事業の本当の目的や住民にとっての意味をきちんと考える必要性を認識した」、「ヘルスプロモーションの真の意味を理解できた」など、大学教員と一緒に勉強することで、地域看護に関するこれまでの理解をさらに深めることができたという内容であった。

「住民理解の深化」は、「町民にすごい力があつたことがわかつた」、「健康とは毎日充実した日々を送れることと答えた人が多く、自分たちの予想とは違い心の面を重視する人が多いことがわかつた」など先のサブカテゴリー同様、共同研究を通して、大学と共に住民の声を聞き自分たちの予測とは異なる結果を得ることで、これまで住民のことを理解していると思っていたが、実際は住民理解が十分でなかつたことに気づき住民理解が深まつたという内容であった。

「実践に取り組む自己の姿勢についての反省」は、「勤務経験が長いことからA町の姿を決め付けていた」のように先の「地域看護の理解の深化」や「住民理解の深化」で自分たちがわかつたつもりになっていた原因となる実践を行う姿勢を振り返り、不十分な点を反省する内容となつていた。

カテゴリー『地域看護実践能力の向上』は13件の記述からなり、「情報活用能力の向上」4件、「思考力の向

表2 共同研究が現場看護職に与えた影響

カテゴリー (記述件数)	サブカテゴリー (記述件数)	記述の要約
保健活動についての認識の変化 (15)	地域看護の理解の深化 (7)	保健事業の本当の目的や住民にとっての意味をきちんと考える必要性を認識した
		ヘルスプロモーションの真の意味を理解できた
		すべてこちらがやらねばという考え方から、住民が主体でこちらは支援をするという考え方にシフトした
		住民のセルフケアを支えることの方が大変だと思う
		住民の本当の意見をきくことで、事業計画の方向が異なることがわかった
	住民理解の深化 (4)	大学と一緒に勉強をすることで、新たな地域看護を学べた
		事業の目的を明確にすることの必要性がわかった
		町民にすごい力があつたことがわかった
		住民という強い見方があるから強気になれるという思いがもてるようになった
		住民の考えていることの実態がわかった
実践に取り組む自己の姿勢についての反省 (4)	健康とは「毎日充実した日々を送れること」と答えた人が多く、自分たちの予想とは違い、心の面を重視する人が多いことがわかった	
	勤務経験が長いことからA町の姿を決め付けていた	
	ただ事業をこなして、疑問もなかった	
	業務に流され、見直しといっても小さな見直しで終わっていた	
地域活動実践能力の向上 (13)	情報活用能力の向上 (4)	考え方が凝り固まっていた
		統計の分析方法1つをとっても何を視点に捉えるかが学べた
		調査結果をまとめるための資料作成のまとめ方が養われた
	思考力の向上 (4)	他の資料を見る目が養われた
		きっとこうだろうと思っていたことを調査で明らかにできることがわかった
		自分自身の考え方の幅が広がった
	実践を通した理解の深化 (5)	考える力がついた
		問いをもち、本を読んで考えることができるようになった
		幅広い考え方・知識を得て、自分自身の見方を変えることができた
		はじめは理論を学ぶ意義がわからなかったが、実践を通してその必要性がわかった
自己の課題の明確化 (2)	「町民の声をきいて上へ提言する」の意味が実践して漸くわかった	
	業務の見直しおよび計画を立案することが実践をとおして理解できた	
実践活動における学びの再現 (5)	はじめは新しいモデルを何故学ぶのかわからなかったが、勉強した理論を活用することを通して「わかった」といえるようになった	
	実践を通して、さらに専門的知識や幅広い視野が必要であることがわかった	
	20代、さらには中高年の健康づくりに取り組みたい	
問題を共有しているという認識の獲得 (1)	今回明らかになった住民の健康観に基づいた健康づくりを進めたい	
自信の獲得 (2)	市町村支援とともに体験したことを、現在の看護に生かしているつもり	
仕事への意欲の向上 (1)	幅広く長期的な視野で計画作りを行う体験を、現在の看護に生かしている	
	今回えた視点(健康の価値や助け合い)で町民と健康問題を話し合っている	
		自ら問い、文献を活用し、考えることで出した結果に納得でき、成長につながった
		今回学んだ保健事業の本当の目的や住民にとっての意味を意識する姿勢で業務を考えている
		これまでできなかった職種間の問題意識の共有ができ、同じスタートラインに立てたと実感できた
		住民がこう思っている、これが大切だということを胸を張っていえる
		自信をもってA町の姿を話せる
		この仕事への魅力を改めて感じ、やる気がでた

上」4件、「実践を通した理解の深化」5件、から構成されていた。

「情報活用能力の向上」は、「統計の分析方法1つをとっても何を視点に捉えるかが学べた」、「きっとこうだろう

と思っていたことを調査で明らかにできることがわかった」のように、方法そのものを知っているだけではなく、自己のめざす理念に視点を定めデータを分析する必要があること、自分たちの仮説を検証していく手法として理

解ができたというように、実践の根拠を明らかにするための情報の見方、調査、分析の手法などの情報活用能力の向上を示す内容となっていた。

「思考力の向上」は、「考える力がついた」、「問いを持ち、本を読んで考えることができるようになった」など自分で考え行動するために必要な思考力の向上につながったという内容であった。

「実践活動を通じた理解の深化」は、「町民の声をきいて上へ提言するの意味が実践して漸くわかった」、「業務の見直しおよび計画を立案することが実践をとおして理解できた」など、実践を通して如何に行うのかという理解へと深化したという内容であった。

その他、「自己の課題の明確化」は、2件の記述からなり「さらに、中高年の健康づくりに取り組みたい」、「今回明らかになった住民の健康観に基づいた健康づくりを進めたい」など共同研究を通して、新たに見出せた自己の課題を表明する内容となっていた。

「実践活動における学びの再現」は、5件の記述からなり「今回得た視点で町民と健康問題を話し合っている」、「幅広く長期的な視野で計画づくりを行う体験を、現在の看護に生かしている」など共同研究を通して学んだことを、そのときの学びだけでなく、現在の実践に活用できているという内容であった。

「問題を共有しているという認識の獲得」は、「これまでできなかった職種間の問題意識の共有ができ、同じスタートラインに立てたと実感できた」という記述1件であった。

「自信の獲得」は2件の記述からなり、提言において住民が大切にしている思いを話せることや、町の姿を自信をもって話せるという自信についての内容であった。

「仕事への意欲の向上」は、「この仕事への魅力を改めて感じ、やる気がでた」という意欲向上につながったという内容の記述1件であった。

### 3. 影響を支えた要因

記述内容は、「教員の視点の違う発言」、「大学教員と共に取り組めたことで、異なる見方や新しい考え方を学ぶことができた」という『異なる視点からの刺激』3件、「教員の肯定的な発言」という『他者の承認』2件、「普段考えていることが自分の立場から発言ができたこと」という『自己の承認』2件、「本を読む機会を得てじっ

くり考えることができたこと」という『考える機会の獲得』1件、「職員以外の第3者が参加することで、雰囲気が悪くなったり、妥協せずに取り組めた」という『安心できる環境』1件、『妥協しない環境』1件であった。

## V. 考察

### 1. 共同研究への取り組みによる影響とその要因との関係

ここでは、共同研究への取り組みにより参加者が受けた影響とその要因との関係について考察をする。

まず、参加者が受けた影響の『保健活動についての認識の変化』および『地域活動実践能力』という2つのカテゴリーの関係であるが、新たなモデルを学び、住民理解や地域看護についての認識が変化したことが、情報活用時の視点の明確化に影響を与え、また、情報活用能力が向上し、データから真の住民の思いや力を明らかにできるようになることで、住民理解や保健活動の認識を変化させていたなど、相互に認識や能力を高めあいがら向上していく関係にあったと考える。

次に、この2つのカテゴリーと他のカテゴリーとの関係についてであるが、前の2つのカテゴリーが相互に影響を与えながら向上していく過程を通して、自己のことができることが表明できたという『自信の獲得』や、現実と目指す姿とのギャップから課題が明らかになったという『自己の課題の明確化』、さらには仕事への魅力を再確認し意欲をもった『仕事への意欲の向上』へと発展していたと考える。

そして、これらの変化と平行して、2年間54回にわたる仲間との対話を通して、職種を超えた『問題を共有しているという認識の獲得』に至っていたと考える。

最終的に、これらの共同研究での学びが、共同研究終了後の実践においても再現し活用しているという『実践活動における学びの再現』につながっていた。

次に、以上の現地参加者が受けた影響を支えていた6つの要因についてみていく。

今回の結果から、共同研究における影響は、『保健活動についての認識の変化』のように、これまで定着していた自己の枠組みを壊し、保健事業の本当の目的や住民の真の姿を理解するに至っていた。これは、共同研究の場が、自己の枠組みを揺さぶる理論の提供や教員の意見



などの『異なる視点からの刺激』を与える場となっていたこと、刺激に対して自らの意見を考え、明らかにする『考える機会の獲得』となっていたことが学びの促進を支えていたものとする。しかし、研究参加者は、新しい理論を学ぶ段階では、‘新しいモデルを何故学ぶかわからない’というような葛藤体験をし、困難感を感じており、肯定的な思いばかりではなかったことが伺える。

人は、基本的に意識する・しないにかかわらず、なんらかの自己実現を目指して生きており、人間ならば基本的に誰もが持ち備えている、自ら働き出す力“対外能動性の働き、発動性”をもつと言われている。自己充実したあり方を目指して、成長発達していく過程には、葛藤を伴うこともあるが、前向きな情緒の安定がはかれることで、次の事柄に立ち向かっていくと考えられている<sup>3)</sup>。

このような発動性の理論に基づいて、今回の共同研究の過程を考察すると、葛藤体験を乗り越えさせた要因として、普段共に仕事をする事のない第三者の大学教員が入り、現場と対等の関係で取り組んだことや、参加者が6名と少なく、個々が自らの役割を果たすことが求められたことで、容易に投げ出せない『妥協しない環境』であったこと、さらに、雰囲気が悪くなる心配をせずに

考えを表現できる『安心できる環境』であったことが影響したと考える。発動性を発揮するための情緒の安定は、承認（見守る、認める、積極的に誉めるなど）の欲求や所属（愛情・仲間意識など）の欲求充足に支えられるといわれている<sup>4)</sup>ように、今回の結果からも、毎回全員が集まって進めてきた過程と、個々が役割を果たすことが求められたこと、雰囲気を心配せずにどんな意見も発言できる環境であったことが、所属欲求を充足していたことが、前向きな情緒の安定につながっていたと考える。

そして、取り組みの中で、自己の意見が認められる『他者の承認』や、自分の考えが発言できたことによる『自己の承認』により承認の欲求が充足できたことも、情緒を前向きに安定させ、目前の課題に立ち向かっていった要因であったと考えられる。

以上のことから、現地参加者は、葛藤体験を感じながらも、共同研究の場で所属や承認の欲求充足を行い、前向きに情緒を安定させることで、共同研究での課題達成に向け取り組むことができ、共同研究終了後も学んだことを再現し、実践につなげることで、自己実現にむけて立ち向かっていると考えた。(図1参照)

## 2. 共同研究の意義

本結果から今回の共同研究では、理論を学び実践に活

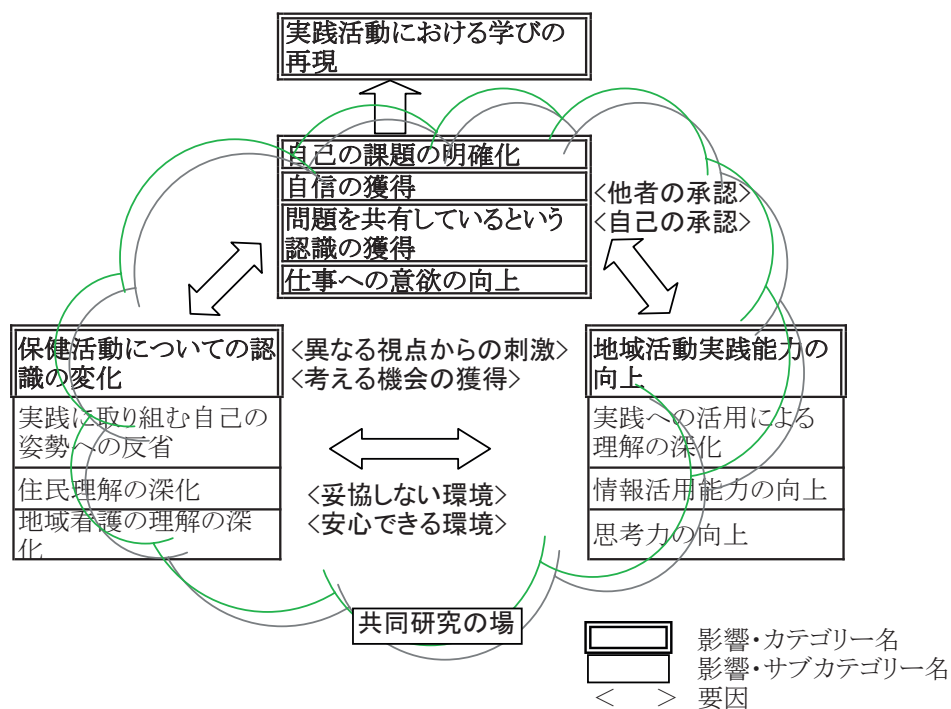


図1 共同研究による影響とその要因の関係

用することで、実践が変化すること、実践を通して理論の意味がようやく理解できることを体験していた。そして、これまでの自己のありようと目指すものとのギャップから、新たな課題を明らかにしていた。これらのことから、大学教員と現地の共同研究の意義としては、看護が、看護として成り立つために理論と実践の両方が必要であることを実感でき、自己の枠組みを拡大できる<sup>5)</sup>という意義があったと考える。

今回の共同研究においては、モデルの学習から健康なまちづくり計画の策定をとともに実践しており、その過程において、参加者個々は、理念達成を常に意識し、新しい理論を学び、それを実践に活用するとは具体的に何をどのように行うことなのかを身をもって体験している。

共同研究の参加者は、自律した判断や行動が求められその責任が問われる専門職ばかりであるが、日常業務の中では、人数が少ないこともあり、今抱えている疑問や課題について議論を行ったり、指導を受けることができる環境にはない。そのため、今回の共同研究の場が、自己の考えや技術を確認したり、明確な根拠をもって実践すること、さらに、理念を共有しその達成にむけて行動することを、具体的な行動レベルで理解する学びの場になっていたと考える。

また、共同研究を通して、これまでの自己の物の見方や考え方、住民の捉え方、情報活用の際の視点などを振り返り、自己の認識が変化していることに気づき、今後の課題を明らかにしていた。これは、2年間に54回におよぶ話し合いの中では、何度となく自己の立場や意見を明らかにし、他者の理解を得ることが求められた。そのことが、自己のこれまでの実践やその基盤にある価値観等を振り返り、これまで経験では当然と考えてきたことが本当にそれでよかったのかどうかを吟味する内省の機会となっていたと考える。そして、共同研究が、大学教員や他職種を含めたメンバーで行っていたことが、より効果を高めたのではないかと考える。

日々の実践の中で、自己の実践の振り返りとその意味の吟味を一人で行うことは容易ではないと思われる。しかし、専門職として、日々の実践に責任を持ち、成長をし続けるためには、自己の実践を振り返り、学びや課題を意味づけ、次の実践に活かしていくという過程を繰り返すことが、重要な学習となるのではないかと考える。

共同研究は、そのようなことに気づく機会であり、そのような方法を学ぶ場としての意義もあると考える。

## VI. おわりに

今回は、共同研究の現地参加者の専門職としての成長の視点から、共同研究が現地参加者に与えた影響とその要因との関係、および共同研究の意義について考察した。

「実践なき理論は空虚であり、理論なき実践は盲目である」というように看護が看護として成り立つには、両者が必要であると実感する<sup>6)</sup>ため、また自己の成長のためにも自己のありようを振り返り、今後の課題を明確にするためにも重要であることが再確認できた。

今回は調査対象とはしなかったが、大学の参加者にとってもその過程は、看護学教育の教育環境を拡充するための共同学習の場であり、各々の成長に向けた人材育成の場である。

今後は、実践と理論の両者の重要性を意識しながら、より有意義な共同研究となるよう取り組んでいくと共に、教員が共同研究の過程においてどのような学びをし、それをその後の実践で活用しているのかを明らかにしたいと考える。

## 文献

- 1) グレグ美鈴, 岩村龍子, 大川真智子, 他: 共同研究実施者の意見に基づく事業の見直しと課題, 岐阜県立看護大学紀要, 5(1); 93-99, 2005.
- 2) エリザベス T. アンダーソン: Community As Partner Theory And Practice In Nursing, 金川克子, 早川和生訳, 医学書院, 2002..
- 3) 近田敬子: 発動性の理論と看護: 体験からの理論構築を目指して, 日本看護研究学会誌, 20(1); 31-35, 1997.
- 4) 近田敬子: 発動性の理論と看護診断 全体性を視座において, 日本看護診断学会誌, 3(1); 5-10, 1998.
- 5) 陣内泰子: 私の看護研究へのとりくみ; 臨床看護実践にこだわって, 看護教育, 39(11); 979, 1998.
- 6) 石原美和: 臨床と教育機関との共同研究の意義, 看護教育, 39(11), 1998.

(受稿日 平成 18 年 1 月 11 日)

(採用日 平成 18 年 2 月 20 日)